

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 最優秀賞

祖父の教え

鳥越中学校三年

伊藤 いとう

梨奈 りな

「ガタガタ、バシャバシャ」

祖母の家にある洗濯機はいつも大きな音をならして動いている。今どきめずらしい二層式洗濯機で音がうるさい分、汚れもよくおちるのだ。

今年のお盆に祖母の住む大阪へ母と二人で帰省した。そんなある日の事、母が二層式洗濯機で脱水をかけていた。祖母の家はお風呂場のすぐ横に洗濯機があるので、排水はホースを使ってお風呂場へと流れるようになってきているのだ。母は脱水を終え、ホースを直そうとしたその時、私は「はっ」とした。ホースをとり出しやすいように柱にフックがつけられていたのだった。そのフックの位置やつける角度が完璧で、とてもやさいな事であったが、私は「すごいなあ誰がとりつけたのだろう。」と関心を持ち、母に聞いてみることにした。

「ねえママ、このフックって誰がつけたん。」「あらそれね、おじいちゃんがつけたんよ。」と返事が返ってきた。そういえば祖父は昔からすごく器用で、趣味は日用大工だった事を思い出した。確かに祖母の家には、いたる所に祖父の作った物が沢山ある。棚や筆筒や靴箱などの大きな家財道具や習字の文鎮やすずりなどの小さな物なども作っていたのだと知り、足下から鳥が立つように驚いた。ありとあらゆるものを自分の手で作り出していた祖父はすごいと思うと同時にカッコイイとも思った。しかし祖父はもうこの世にはいない。

脳出血と肺炎を併発して亡くなった。八十歳だった。お盆だからこそ、亡くなった祖父の偉大さがよく分かるような気がする。

祖父は若い頃に日立造船という造船会社に勤めていて日本の経済の発展へとつくしてきた。祖父はとても真面目な性格で地道に働いた結果、会社から数枚の感謝状が送られて今も賞状を額に入れて家にかざっている。やはり地道に何かに取り組んでいる人こそ、必ず誰かがその姿をしつかりと見ているのだと思った。「塵も積もれば山となる」と言われる様に私も何事に対してもコツコツと一歩ずつ取り組んでいきたい。今ではもう祖父の働いていた日立造船の桜島工場は取りこわされて、みなさんも一

度は行った事があるテーマパークのユニバーサルスタジオジャパンが後に建設された。私は四月の修学旅行で行ったばかりだったため、祖父が働いていた場所だなんて思いもよらなかった。

定年退職後も祖父は、大好きな日用大工に励んだそう。人々が集まる集会場の靴箱や親戚の家を建てる時の手伝いなど、周りの人たちの役に立つ物を作っていたそう。私が思うに祖父は「人の喜ぶ顔が見たい」という思いやりの気持ちで物作りをしていたのだろう。なぜなら祖父のお葬式に沢山の人が

「勝人さんにはよくお世話になったわ、作ってもらった物は大切にします。」

と言っていたからだ。

そうやって他のために自分が出来る事をしてつくすという事は思いやりがないと出来ない事だと思った。私も祖父のように友達や家族に思いやりの心を持つて喜んでもらえるような行動をしていきたい。

祖父は亡くなる数年前にアルツハイマー型認知症にかかり、老人ホームに入居した。私も大阪へ帰省した時は必ず老人ホームへ足を運んだ。老人ホームでも週に二・三回手作業をする時間があったらしく貼り紙や折り紙などの細かい作業を行っていたそう。私も祖父の作品を実際に見せてもらったのだが、実に綺麗に折ったりのりでむら無く貼ったりとていねいで立派な作品で、これには職員の方も驚き、感嘆の声を漏らしていたそう。器用で几帳面な性格はいつまでも変わらないのだと思った。

私は今年の冬に大きな節目を迎える。それは高校受験と中学卒業。進路について自分としっかり向き合っていかななくてはならない。将来は昔から習っていたピアノや美術を少しでも活かすことの出来る仕事に就きたいと考えている。大きな節目を迎える年のお盆に祖父について考えさせられるのは、きつと祖父が空から「こんな生き方もあるんだよ。」と見えない形で送ってくれたからなのかもしれない。だから、私はお盆の最

後の日に心の中で祖父に誓った

「おじいちゃん。梨奈は努力して受験合格してみせるから、いつもそばで見守っていてね。」と。嫌な事や後悔などこの先にどんな大きな壁があるか分からないが、一つ言えることは、祖父のように思いやりと謙虚さと地道な努力をしていけば必ず誰かが見てくれて認めてくれるという事。この事を忘れずに今後の人生を生きていきたいと思う。最後にこの生き方を教えてくれた祖父に感謝の気持ちを伝えたい。

「ありがとう」

